

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	放課後等デイサービス ゆあてらす		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 20日		2026年 3月 15日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14人	(回答者数) 10人
○従業者評価実施期間	2026年 2月 20日		2026年 3月 20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5人	(回答者数) 5人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 26日		

○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	支援前後のミーティングや日報を毎日欠かさず実施し、全職員がリアルタイムで子どもたちの状況を共有しています。これにより、個別支援計画に基づいた一貫性のある療育をチーム全体で提供できていると思います。	死角をなくし、職員全員で見守りができる開放的なレイアウトを採用することで、安全管理を徹底しています。また、感染症対策を含む衛生管理をルーチン化し、心地よく過ごせる空間作りを工夫しています。	開放的な空間の良さを活かしつつ、集中力が必要な課題やクールダウンのための個別活動スペースを、簡易テントやパーテーション等を用いて段階的に整備します。これにより、刺激をコントロールし、より個々の特性に合った環境を整えます。
2	保護者アンケートにおいて「子どもに寄り添った支援」に対し極めて高い満足度をいただいています。送迎時や電話、ブログ等を通じた細やかな情報共有を大切にしています。	外部研修(HUGやLITALICO等)への参加を推奨し、受講後は内部研修を通じて全職員で知識を共有しています。職員の「学びたい」という意欲を組織の支援力向上に繋げています。	保護者同士の交流会や、家庭で役立つ療育情報の提供を、参加しやすい形態で順次実施します。
3	5領域に基づいたプログラムを公表・実施しています。また、遊びの選択肢を提示し、お子様自身が選ぶ「自己決定」の機会を設けるなど、本人の意思を尊重した支援を実践しています。	7ヶ月ごとの定期的なモニタリングに加え、日々の行動観察を日報に記録し、子どもたちの小さな変化や新たなニーズを随時支援計画に反映させるサイクルを構築しています。	保護者様からの具体的な要望(買い物体験、公共交通機関の利用等)を受け、地域社会との接点を増やす体験型プログラムを計画的に取り入れます。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	開放感と安全管理を優先したレイアウトのため、視覚・聴覚情報の遮断が難しく、集中が必要な場面やクールダウンが必要な際、刺激をコントロールしきれない面があります。	死角をなくす安全確保と、スペースの有効活用の両立を優先した結果、物理的に区切られた個別スペースの設置が後回しになっていたことが要因として考えられます。	一律に壁を作るのではなく、活動に合わせて柔軟に空間を区切れる可動式の仕切りの導入を検討し、集中と開放を使い分けます。
2	事業所内の支援体制の確立を優先してきたため、近隣の学校や児童館、他の福祉サービス事業所等との情報共有や交流機会の創出が十分に行えていません。	日々の直接支援と内部業務(計画作成・記録等)にリソースを集中させており、事業所外へのネットワーク構築に充てる時間と手順が確立されていなかったことが要因として考えられます。	保護者要望の多い「買い物体験」や「公共交通機関の利用」を療育プログラムの柱の一つとして位置づけ、マニュアルの作成とスタッフの役割分担を行い、安全かつ計画的に実施します。
3	日々の個別連絡は密に行っているが、保護者同士が繋がる場(保護者会)や、専門的な情報共有を定期的・組織的に提供する体制がまだ弱いです。	保護者様の就労状況やニーズが多様化しており、ニーズに合致した開催形態やテーマの選定、運営のノウハウが不足していたことが要因として考えられます。	家族支援の充実を図るため、今後は「体験型保護者交流会」の実施を検討します。療育プログラムを保護者様にも一緒に体験していただくことで、支援目的の共有を図るとともに、共通の体験を通じて保護者様同士が自然に繋がれる場を創出します。